次回の定期演奏会をちょっと予習

山野雄大

©Hikaru Hoshi

©Takehiko Matsumoto

©FUKAYA_Yoshinobu auraY2

第195回定期演奏会

2023年3月17日（金）17：45開場　18：45開演
三井住友海上しらかわホール
指揮/角田鋼亮（常任指揮者）
メゾ・ソプラノ清水華澄*　テノール/望月哲也*
ショスタコーヴィチ：交響曲第9番
マーラー：交響曲「大地の歌」
［室内オーケストラ編曲版］（編曲/萩森英明）*

独創的な4作品の多彩さをお楽しみいただいている本日に続きまして、次回・第195回定期（3月17日）は、マエストロ角田鋼亮の指揮で傑作交響曲をふたつ。ショスタコーヴィチの交響曲第9番、そしてマーラーの交響曲《大地の歌》‥‥は、大編成オーケストラのための原曲から、なんと室内オーケストラ版に編曲したヴァージョン（萩森英明編曲）を世界初演いたします。気鋭の作曲家による、セントラル愛知交響楽団のサウンドに最も適した新編曲‥‥素晴らしい出逢いをお楽しみに！

◆ショスタコーヴィチの〈第九〉

平和な日常なら笑い話になるようなことでも、時と場合によっては、悲劇につながることがあります。ロシアの作曲家、ドミトリイ・ショスタコーヴィチ（1906～1975）の傑作・交響曲 第9番 変ホ長調 Op.70（1945年作曲）も、作品の素晴らしい出来とは何の関係もないところで非難を浴びる‥‥という不運に見舞われた曲でした。

1945（昭和20）年のはじめ。第2次世界大戦もナチス・ドイツの敗色が既に濃くなっていた頃ですが、ロシアのショスタコーヴィチの周囲では、彼が〈戦争の勝利と偉大な国民に捧げる交響曲〉を書いている‥‥という期待が高まっていました。

しかも、それはショスタコーヴィチの9番目の交響曲になるはずです。〈第九〉といえば、《歓喜の歌》で知られるベートーヴェンのシンフォニー。新作はきっとベートーヴェンにも負けない祝祭的な大作に違いない！と周りが期待したのも無理はありません。

ところが。ショスタコーヴィチは書きかけていた作曲を途中でやめてしまい、あらためて全く別の交響曲を書き直したようです。1945年の7月から8月にかけて一気に書き下ろされた〈交響曲第9番〉は、合唱つきでもなければ大作でもありませんでした。

それどころか、軽快でコミカルな表情に満ちた曲調のあちこちに、風刺も効いた曲調。緩徐楽章で深刻な表情をみせたかと思えば‥‥伏せた顔をあげてにやりと笑うように始まるフィナーレは、すべてを陽気に笑い飛ばすような落差でぎょっとさせもします。

◆聴けば聴くほど、快活な笑いの奥に潜んだものが‥‥

周囲の期待と真逆の、軽快な〈第九交響曲〉。作品だけみれば、魅力に溢れた傑作に違いないですし、初演も大成功を収めます。――しかし、〈勝利の交響曲〉という期待を裏切り、戦争を勝利に導いた指導者スターリンを讃えることなく、パロディと風刺で笑い飛ばすような‥‥と曲解する向きもありました。政治権力側の動きを敏感に反映する批評家や音楽学者たちは、「ショスタコーヴィチは、ソ連にふさわしい社会主義リアリズムの路線に反している！」と批判をはじめたのです。

それからショスタコーヴィチが巻き込まれた厳しい現実‥‥芸術を統制しようとする権力の激しい圧と、それにぎりぎりで抵抗する作曲家の姿は、千葉潤『作曲家◎人と作品　ショスタコーヴィチ』［音楽之友社／2005年］や、ローレル・E・ファーイ／藤岡啓介・佐々木千恵訳『ショスタコーヴィチ　ある生涯［改訂新版］』［アルファベータ／2005年］に詳しく書かれています。歪んだ政治と、それを利用した有形無形の暴力‥‥。

――時代を経て聴き直してみると、なるほど独裁者スターリンへの風刺が隠されている、という説にも頷けるところがありますし、マーラーからの引用ではないか‥‥と指摘される箇所もあったりと、謎解きをはじめれば、どんどん奥も深くなる作品です。

しかし、引き締まったサウンドを（効果的に！）活かし切りながら、無駄なく軽快に、しかしめくってもめくっても裏のあるような不思議な面白さも持ち合わせたこの曲は、まったく先入観抜きで聴いたとしても、なにか不気味な笑いも浮かびあがってくるに違いありません。食えない魅力を潜めた傑作、とでも申しましょうか。

◆〈第九のジンクス〉?

ショスタコーヴィチの交響曲第9番が、〈第九〉への過剰な期待もあって批判を招いた‥‥というのは話をはしょりすぎではありますが、ベートーヴェンの交響曲が後世に〈第九のジンクス〉を残したのは、次回定期でお聴きいただくマーラー《大地の歌》にもちょっと関係してきます。

ベートーヴェンの時代あたりから、〈交響曲〉は限られた数の作品を渾身の力を込めて書きおろす渾身の大作‥‥というイメージが生まれてきます（もちろん例外も山のようにありますが）。そんななか、生まれたのが〈第九のジンクス〉。ベートーヴェ

ンが9つの交響曲で生涯を終えてしまったうえに、それに続く偉大な交響曲作曲家であるブルックナーも、第9番を途中の楽章まで書き上げたところで亡くなってしまっています。

そのジンクスを気にしてしまったのが、オーストリアで活躍した作曲家グスタフ・マーラー（1860〜1911）だといいます。それで、マーラーは実質的に9番目の交響曲にあたる作品から敢えて番号を外し、交響曲《大地の歌》とした‥‥といいますが、真偽のほどはさておき。

ところが、この《大地の歌》に続く新作交響曲が、タイトルのつけようもない純粋な器楽交響曲だったため、マーラーはそちらに〈交響曲第9番〉とつけます。そして、それに続く〈交響曲第10番〉を未完のままで病死してしまったので、まさに〈第九のジンクス〉が実現してしまった‥‥というお話。ご本人は言うほど気にしていなかった、という説が強いのですが、小咄としては良くできております。

◆めぐりあわせ以上の、必然。

この《大地の歌》（1908年）は、交響曲にしてはちょっと変わった作品です。全6楽章、それぞれに声楽の独唱（テノール、そしてアルト［またはバリトン］独唱が交互に登場）がついているので、〈オーケストラつきの歌曲集〉のように聴こえる部分なきにしもあらず。さりとて、歌曲集と言うには規模が大きくて、なるほど交響曲的ではあり‥‥。

しかも、歌詞はすべて中国の古い詩によるものです。李白や孟浩然、王維といった（日本でもおなじみの）詩人たちの作品を、19世紀ヨーロッパ諸語に翻訳された選詩集から、ハンス・ベートゲ（1876〜1946）という人がドイツ語へ重訳した詩集『中国の笛』から歌詞を引いています。

この『中国の笛』という選詩集、当時はずいぶん売れたんだそうで、マーラーをはじめ多くの作曲家が古い中国の詩に魅せられて、歌曲などの創作に活かしています。当時のヨーロッパの芸術家たちが、遙か遠い東洋へ寄せた憧れの想いは、マーラーのこの《大地の歌》（の特に前半）にも薫るように響いています。

そんな独創的な作品であるがゆえに、マーラーも交響曲としては番外とした‥‥というあたりが正解という気もします。いずれにしても、ショスタコーヴィチの第9番とマーラーの交響曲《大地の歌》、次回定期に並んだ2作ともども、〈第九〉にまつわる期待やジンクスとも関わっているわけです。

余談はさておき――むしろ大切なポイントは、ショスタコーヴィチがマーラーの作品を熱心に研究し、生涯にわたって強い影響を受けていた、という関係性です。このふたりをあわせて聴く体験には、めぐりあわせ以上の必然がある、とも言えましょう。

ショスタコーヴィチの作品で、哄笑と皮肉の裏に響く〈生〉の強靱さ。あるいは、マーラー作品の特に最後の楽章《告別》で、全曲の半分にあたる30分もの時間をかけて（！）響く、美しく幻想的ななかにも厭世的な、あるいは無常へのまなざしが漂うような印象‥‥。あわせてお聴きになると、お互いを照らし合う発見もあるはずです。

◆《大地の歌》の新たな理想像を――室内オーケストラ版の新編曲・初演!

ところで、マーラーは当代を代表する大指揮者でもありました。毎年の夏休みに、美しい避暑地の山荘にこもって交響曲を書き、それを自分で指揮して初演し、実演の印象から楽譜を修正‥‥というパターンで新作を発表していました。

ところが、この《大地の歌》を書いた翌々年にマーラーは急逝。実際の響きを聴いて楽譜を修正することは叶いませんでした。

もし彼が実演を聴いていたら、おそらく楽譜に手を入れていたでしょう。というのも、緻密に書かれたオーケストラが大編成すぎて、実演ではどうしても独唱を圧倒してしまうのです。現在では、指揮者があれこれバランスに気を配って演奏するのですが、「むしろ編成を小さくしてしまえば?」という考えも生まれてきます。

そこで、《大地の歌》には編成を小さくした室内オーケストラ版の編曲がつくられ続けています。最近では、いずみシンフォニエッタ大阪が世界初演した、マーラー自身によるピアノ編曲版の研究成果も活かした川島素晴編曲版（2020年2月／同楽団のYouTubeチャンネルで初演の映像が見られます）など、さまざまなチャレンジが続いています。

セントラル愛知交響楽団の次回定期では、また新しい室内オーケストラ版が響きます。萩森英明さんによる新アレンジ――萩森さんの作品は、第188回定期（2022年3月）で《Novelette for Violette On a Theme by Scarlatti》をお聴きいただきましたので、ご記憶のかたも多いと思います。作曲・編曲それぞれで大活躍する萩森さんが、《大地の歌》の音宇宙を新たな色へ‥‥その瞬間を実際に体感するのは実に楽しみなこと。ぜひホールでご一緒に！

やまの たけひろ
山野雄大

Profile

ライター［音楽・舞踊評論］。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く　昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。